

# 「みたけ」という語

国学院大学教授  
神道学博士

三橋 健

## 日本は山島の国

『魏志倭人伝』は三世紀ごろの日本を知る貴重な史料であるが、その冒頭に倭国の地形を説明して「山島二依りテ国邑ヲ為ス（原文は漢文）」と記してある。山島とは高い山々が連なっている島のこと、また国邑とは王や諸侯の領地、つまり国ということである。要するに、日本国は高い山々が多い島国であると述べている。

それからざっと千七百年という歳月が流れ、そのあいだに日本の国土にもいろいろと移ろいはあったが、前掲の『魏志倭人伝』の説明を、今の日本に對して用いても不都合ではない。

いささか大仰な言い方をすれば、日本の全土の約八〇％が山地であり、各地に高い山々が聳えており、それらのほとんどが靈山として、人々の信仰の対象となっている。

## 武州みたけは関東第一の靈山

手近の『修験道辞典』によれば、我が国で靈山となっている山々は三百五十一あり、これを地域別に見れば、東北地方に四十九、関東地方に五十六、中部地方に六十四、近畿地方に五十九、中国・四国地方に六十六、九州地方に五十七となる。

武州みたけ山は、関東地方の五十六の中の一つで、その名の通り、武州きつての靈山である。武州とは武蔵国の別称で、今の東京都・埼玉県、および神奈川県の東北部にあたる。

しかし、当山に對する信仰は、武州に限るものではない。近世になると、御師のめざましい布教活動により、関東の各地に御嶽講が組織され、それは甲信越地方にまで及んだのである。

標高九百二十九メートルのみたけ山の山頂からは、相模・武蔵・安房・上

ら行われていた漢字の発音表記法である。つまりある漢字の発音を示すのに、他の漢字二字で表すのであるが、その場合、上の漢字の頭の子音と下の漢字の韻とを組み合わせるのである。例えば「嶽は五角の反」とあれば、gakui=g(○)+反となるわけである。

次いで「嶽」は「岳」にも作るとあり、続いて「岳」と「丘」は同じ訓みであるかは未詳としている。これに對して掖斎は例証を掲げながら、「岳」と「丘」は同じ訓みでなく、意味も相違すると述べ、古人の誤謬をただしている。確かに掖斎が説くように「丘」は「を」と訓み、「岳」は「たけ」と訓むのであり、意味も相違する。

次に『漢語抄』を引いて、「嶽」は美多介と訓み、その意味は高く大きい山という意味であるとしている。

また平安時代末期に成立した『類聚名義抄』（『名義抄』）や『色葉字類抄』にも「嶽」と「岳」の訓み、意味などを記しているが、いずれも『和名抄』の説明と大同小異である。

時代は下がるが、新井白石の『東雅』や谷川士清の『和訓栞』に、「みたけ」

総・下総・常陸・上野・下野の関八州、すなわち今の東京都と神奈川・埼玉・群馬・栃木・茨城・千葉の六県のほぼ全域を俯瞰できる。すなわち眼下に関東平野がひらけ、首都東京の高層ビル群を越えて深く湾入している東京湾、そして房総半島、さらには江ノ島を眺望する。また北部には遠く日光連山や筑波山を望み見る。当然これらの地域からも靈峯みたけ山を仰ぎ見ることができるのであり、そのことが武州みたけの信仰を成り立たせている大きな要素の一つとなっている。

## 「嶽」「岳」の訓みと語義

ところで武州みたけの信仰を述べるにあたり、「みたけ」の語義について考えておかねばならない。そこで順序として古辞書を繙いてみよう。

初めに源順が著した『和名類聚抄』（『和名抄』）を見てみよう。この辞書は承平年間（九二二〜九三八）に成立した我が国で最初の分類体の漢和辞書で、現在、十巻本と二十巻本とが伝わっている。その十巻本の第一巻に、「嶽」について、

の「み」は峯の「み」で、「たけ」は「高」の意であるとしている。留意すべきであろう。

## まとめ

山に對する信仰は、日本固有のものではなく、古くから中国や朝鮮でも盛んであった。中国の四嶽（泰山・華山・衡山・恒山）や朝鮮の三山（奈歴・骨火・穴礼）の祭りは有名である。

「みたけ」は、我が国の山岳信仰から生まれた言葉である。「たけ」は、「嶽」「岳」とも書き、その意味は大きくて高い山のことである。解字によれば、とがった峯がよきよき並んでいる意であるという。人々は、このような山々を靈峰・靈山と称し、畏敬の念をもって仰ぎ見たのである。

そのことは「みたけ」の「み」によく表れている。「み」は接頭語であるが、本来は神などのような靈妙なものに對して畏敬の念を表した語である。つまり「み」は「御」で、この「御」は「嶽」「岳」を美しいと褒め称え、さらに崇高・偉大なものとして畏まり敬っていることを表している。

「蔣魴曰ク、嶽〔五角ノ反〕、字ハ亦岳ニ作ル。訓ハ丘ト同ジキコト、未ダ詳ラカナラズ。漢語抄ニ云フ、嶽ハ美多介、高山ノ名ナリ」（原文は漢文）と見える。

まず「蔣魴曰ク」とは、狩谷掖斎が『箋注倭名類聚鈔』（『和名抄』の注釈書）で説くように、蔣魴が著した『切韻』五巻のことである。当書は平安時代初期に成立した『日本国見在書目録』（藤原佐世撰）に記載されている。

「見在」とは現存の意であるから、当書は九世紀までに伝来していたことになるが、今は伝わらない。

それはともかく、蔣魴の『切韻』に「嶽」の字の発音を「五角ノ反」としている。反とは反切（切韻・単に切とも）のことで、中国の魏・晋代か

## 〔筆者紹介〕

三橋 健

国学院大学教授・博士（神道学）  
昭和十四年、石川県に生まれる。  
国学院大学大学院博士課程修了。  
著書に『神々の原影』『厄祓入門』『みそぎ考』などがある。